

一八八六年一月五日(火)

信者たちの強い離欲——世俗の生活と地獄の苦しみ

翌日、一月五日、火曜。ポウシユ二十二日。^{アマツアーンヤ}新月が長く続いている。朝の四時、タクール、聖ラーマクリシユナはベッドの上に坐つてモニと二人きりで話をしておられる。

聖ラーマクリシユナ「クシーロドが、もしガンガーサーガルに巡礼に行くことになったら、お前、毛布を一枚買ってやってくれないかね」

モニ「かしこまりました」

タクールはちよつとの間黙つておられたが、再びお話しになる。

聖ラーマクリシユナ「ねえ、青年たち^(訳註)にいったい何が起こつているんだろうね？ 何人かはプリー^(訳註)

に行つてしまふし、——ガンガーサーガル^(訳註)に行くと言つたり！

みんな家を捨てて来ているんだよ。ナレンドラを^(訳註)ごらん。強い離欲の心が起これば、世間は深い恐ろしい井戸のように感じるし、家族や親戚は毒へびみたいに見えてくる」

モニ「おっしゃる通り、世俗の生活はまことに苦勞なものでございます！」

聖ラーマクリシユナ「地獄の苦しみさ！ 生まれたその時から！ わかるだろう、妻や子を持つと

いうことがどれほど苦勞なものだから」

モニ「全く、その通りでございます。そして、あなた様が仰せられましたが一あの若者たちはまだ、世俗とは何の關係も持っていない、世間に貸しも借りもない。世俗の貸し借りがあれば、この世にしばられるのだと——」

聖ラーマクリシュナ「ごらんよ、ニランジャンを！ さあ、お前のものは持つていけ！ さあ、私
のもののはこつちへよこせ！^(訳註3)——世間に対してこれだけの気持ちだ！ もうそれ以上、何も關係を持つていない。後ろ髪を引かれるものは、もう何もないんだよ！

女と金、世俗はこれだけだ。金を持てば貯めようという気が起る。際限きりのない話だ」
モニがハツハツと笑い声をたてた。タクールもお笑いになった。

モニ「金を出すときには、よくよく熟慮いたします（二人で大笑い）。

でも南ナンキトシヨル神寺でおっしゃいましたが、三つのグナを超越してから世間に住むと、また話は全然違ふということで——」

(訳註1) プリー——クリシュナを祀るジャガンナート寺院のあるオリッサ州東部の都市でヒンドゥー教の四大聖地の一つ。

(訳註2) ガンガーサーガル——ガンジス河がベンガル湾に注ぐ河口でヒンドゥー教の聖地。

(訳註3) ニランジャンの言った言葉は、大家族で親戚との關係が深い当時のインド社会で、血縁關係の煩わしさ——世俗とのつながりにケリをつけるために出た言葉と思われる。

聖ラーマクリシユナ「そうさ、子供のようにな」

モニ「はい、しかし、それが非常にむずかしいことなのでございます。大へんな精神力の持ち主でなければ……」

タクールは少し黙っていらつしやる。

モニ「昨夜遅く、彼等は南神寺トウキョウシヨウに瞑想に行きました。私は夢を見ました」

聖ラーマクリシユナ「どんな夢を見た？」

モニ「ナレンドラたちが出家になって——聖火トウニを燃やして、そのまわりに坐っています。私もその中に坐っているのです。彼等はタバコを吸って、煙をパーツと吐き出しています。すると私が、『大麻ガンシヤの臭いがある』と言いました。(訳註——諸国を歩いている出家たちの多くは、ガンシヤ(インド大麻)を吸う習慣がある)

〔サンニヤシシ出家とは？——タクールの病氣と子供の境涯〕

聖ラーマクリシユナ「心の中で捨てればいいんだよ。それができた人も出家サンニヤシシと言える」

タクールは黙っておられる。そして又、再びお話しになる——

聖ラーマクリシユナ「だが、自分の欲に火をつけて燃やしてしまわなければいけない。それでこそ出来るんだ」

モニ「ブラバザールから来たマロワリ人たちの学者せんせいにおっしゃいましたね。『信仰への欲がわたし

にはある」と。——信仰を持ちたい、深めたいという欲は、欲のうちに入らないのでございませぬ？」
聖ラーマクリシユナ「ヒンチャ・シャークが菜つ葉(訳註)の仲間に入らないようにね。あれは胆汁の分泌を抑える(肝臓の薬になる)。

「アツチャ、あんなに楽しくて恍惚うつろしていたのに——あれはみんなどこに行っちゃったんだろう？」
モニ「ギーターに三グナトリを超越することが書いてありますが、その境地におなりになったのだと私は思います。サットヴァとラジャスとタマスがそれぞれ自分勝手に発動するが、あなた様はそのどれにも関係しないという状態に——。サットヴァ性からも離れて、関わりをお持ちにならない」

聖ラーマクリシユナ「うん。子供の境涯きやうがいに置かれているんだね。

「アツチャ、今度は体が保たもないだろうな？」

タクールとモニは沈黙している。ナレンドラが下から上がってきた。一度、家に帰るのだろう。家のことを片付けてから来るつもりなのだろう。

父親の他界後、彼の家族は大そう困窮していた。——時どき食事にも事欠く有様だったので、ナレンドラだけが家族の頼みの綱だった。ナレンドラが働いて、みんなを食べさせてくれることを期待し

(訳註4) ヒンチャ・シャーク——湿地に生える多年草で和名は沼菊菜ヌマキナ。シャークは葉物野菜全般を指し、食べるとお腹おながゆるくなるが、ヒンチャ・シャークは葉物野菜の仲間ではなく、お腹おながゆるくならない。どこにでもあっておいしく、からだにもよい野草である。

ていた。しかし、ナレンドラは法律の試験を受けなかった。今まさに、強烈な離欲の精神に支配されているのだ！ 今日家族のために、何ほどの準備をするためにカルカッタに行くのだ。友人の一人が、彼に百タカ貸してくれるという話である。その金で三ヶ月ほどの生活費を手当てして、またここへ来るつもりらしい。

ナレンドラ「一度家へ帰ってきます。(モニに) 途中、マヒマー・チャクラバルティの家に寄つていこうと思つていますが、あなたもいっしょにいらつしやいませんか？」

モニには行く意志がない。タクールはモニの方を見ながら、「なぜ？」とナレンドラにお聞きになる。

ナレンドラ「あちらの道を通つていくので、あの方のところへちよつと寄つてしゃべつて行こうと思つのです」

タクールはナレンドラをじつと見つめておられる。

ナレンドラ「ここに来る友人の一人が、僕に百タカ貸して下さいます。そのお金で、家の三ヶ月分の生活費にあてるように取り計らつてくるつもりです」

タクールは黙つていらつしやる。そして今度は、モニの方を見ておられる。

モニ「(ナレンドラに)——いや、君、行つて来たまえ。私は後にします」